まち結ぶ市民劇

登米・夢フェスタ水の里10作目

―中―

住民参加 延べ1300人超す

手づくり

準備1年掛かり

登米祝祭劇場（登米市）を拠点とする創作劇「夢フェスタ水の里」はプロの手を借りず、題材選びから会場運営までを普通の住民たちが担う。

その年の中心メンバーは公演が終わると直ちに翌年の準備に取りかかり、公演の半年前には実行委員会やスタッフ、四カ月前には役者の住民たちがステージ作りの輪に加わる。参加人数は毎年百五十人前後になり、昨年までの総人数は延べで千三百人を超えた。

登米市中田町出身で、今は仙台を拠点に演劇活動を展開する菅原みちやさん（三）もその一人。以前から表現活動に興味があった菅原さんは、知り合いの誘いで夢フェスタと接点を持つ。

舞台の道に転身

「普通ならまず出会わないような、仕事も年齢もさまざまな人たちが知り合い、一つの舞台を作り上げていく。そのエネルギーはすごかった」

〇一年の公演直後、菅原さんは自動車整備の仕事を辞め仙台に移り住んだ。二度の公演をきっかけに、「芝居の面白さを知り、舞台の世界を勉強したくなった」ためだった。

フリーの立場で役者や舞台監督として活動し、これまでに約三十作品に出演した。初の一人芝居にも挑戦し、東京や大阪なども回った。「最近は観客の呼吸が分かるようになった。映像にも進出して、役者としての幅を広げたい」。一層の飛躍を誓う気鋭の舞台人は、今も夢フェスタの感動を決して忘れない。

夢フェスタ過去九回の合計入場者数は一万三千八百二十七人。客席から舞台の上へ、参加の形を変えた人も少なくない。

自宅の庭から登米祝祭劇場が見えるという三條喜一さん（六三）＝登米市迫町＝にとって、劇場は長らく、「年数回しか行かない近くて遠い存在」だった。それが、夢フェスタによって劇場が身近な存在になった。

懸命な姿に感動

一九九九年の初回を見て「素人の劇だからとあまり期待しないで見に行ったのに、出来の良さに驚いた」。一生懸命な参加者の姿に心を打たれ、以来、公演が毎年の楽しみになった。

退職して時間に余裕ができたため、旧南方町の町制施行四十周年を記念した二〇〇五年の第七回公演「耕野の花」からは毎回、出演者としてステージに上がっている。

十回目の「『軽便こ』は時空を超えて　仙北鉄道物語」で務める登米駅の駅長は、これまでで最も思い入れが深い役だ。

JR東日本の小牛田運輸区（美里町）に国鉄時代から約四十年間勤務し、通勤の足として仙北鉄道を利用した経験がある。「不思議な縁を感じる。精いっぱい演じて、多くの人に感動を与えたい。自分にとって夢フェスタは生きがいになった」

きょう十六日夜。元鉄道マンが、待ちかねたスポットライトを浴びる。

メモ　夢フェスタ水の里の予算は、登米文化振興財団からの受託費と入場料収入が2本柱。初回はそれに補助金と協賛金などを加え625万円。回を重ねるごとに減り、今年の第10回公演は受託費170万円、入場料収入80万円の計250万円を見込んでいる。

けいこに励む三條さん（中央）。演技経験は「学芸会程度」だったが、今では夢フェスタの常連だ＝登米祝祭劇場